

修士論文(要旨)
2014年1月

人格適応論とストレスコーピングの関連性
—大学生を対象として—

指導 中村 延江 教授
心理学研究科
臨床心理学専攻
212J4008
庄司 真理

目次

はじめに	1
第1部 先行研究	3
1. 人格適応論について	3
1) 人格適応論とは	3
2) 各適応タイプの特徴	5
3) 「コンタクト・ドア」について	8
4) 人格適応論を用いた事例	9
2. 対人ストレスについて	10
1) ストレス研究	10
2) 対人ストレスコーピングとは	11
3) 親の養育スタイルとストレスコーピングやストレス	13
3. 大学生のメンタルヘルス	13
1) 青年期の発達課題	13
2) 学生相談の現状	14
4. 全体のまとめ	14
第2部 本研究	16
1. 意義	16
2. 目的	16
3. 仮説	17
4. 方法	17
1) 調査対象者	17
2) 調査期間	17
3) 手続き	15
4) 調査内容	17
5) 分析方法	18
6) 倫理的配慮	18
5. 結果	19
1) 適応タイプと対人ストレスコーピングとの相関係数結果	21
2) 適応タイプと対人ストレスコーピングとの重回帰分析結果	21
3) コーピングスタイルにおいて1SD以上の被験者を対象とした適応タイプの特徴(一元配置分散分析)	22
6. 考察	25
1) 相関係数から見る、適応タイプと対人ストレスコーピングとの関連性	25
■ 創造的夢想家とストレスコーピングとの相関	26
■ 魅力的操作者とストレスコーピングとの相関	27
■ 才気ある懐疑者とストレスコーピングとの相関	28

■おどけた反抗者とストレスコーピングとの相関	29
■責任感ある仕事中毒者とストレスコーピングとの相関	29
■熱狂的過剰反者とストレスコーピングとの相関	30
2) 重回帰分析から見る、適応タイプと対人ストレスコーピングとの関連性	30
3) コーピングスタイルにおいて1SD以上の被験者を対象とした適応タイプの特徴(一元は配置分散分析と多重比較)の考察	31
7. 総合考察	31

引用文献

謝辞

資料 質問紙

1. 問題と目的

現在、心理社会ストレス研究において、対人関係がストレッサーとなる可能性は少なからず指摘されており（加藤，2000；嶋，1992）、青年期においては、発達課題に直面する際に、対人ストレスの生起は不可避であることも知られている（Seiffge-krenke & Shulman, 1993）。青年期に位置する大学生のメンタルヘルスの中でも特に対人関係によるストレスが多いことが明らかとなっており（日本学生支援機構，2011）、多くの大学生が対人関係において様々なストレスを感じ、人それぞれ対処方法を選択している。

心理臨床の領域では、患者もしくはクライアントに対して予診やインテーク面接を行う際、多くの場合、家族や生育歴に関する情報を収集する。それは、その人をよく知るための情報であり、少なからず両親の養育スタイルや環境がその人の特性と関連していると考えられているからである。対人関係におけるストレスへの対処方法（対人ストレスコーピング）をどのように選択するかという点においても、その人の特性が反映された対処だと考えると、両親の養育スタイルが対人ストレスコーピングの選択に影響しているのではないかと考えられる。

これらを踏まえ、本研究では親の養育スタイルと対人ストレスコーピングの選択との関連性を調査する。調査をする際、親の養育スタイルと、それに対応した子どもの性格が6タイプ（魅力的操作者・おどけた反抗者・創造的夢想家・才気ある懐疑者・責任感ある仕事中毒者・熱狂的過剰反応者）あるとされる『人格適応論』という、最近注目されている理論を基に研究を進める。人格適応論では、6つのタイプ毎に他者と関わる入口である「オープン・ドア」と、治療のターゲットになる「ターゲット・ドア」、治療の結果大きな変化をもたらす「トラップ・ドア」が存在すると考えられており、この3つの「ドア」には〈思考〉〈感情〉〈行動〉のいずれかがあたり、その組み合わせは適応タイプ毎に異なる。「ドア」の選択を間違えると、相手と信頼関係を築けなかったり、治療に抵抗が生じるため、「ドア」の選別は重要だと言える。

本研究では人格適応論を中心に、対人ストレスコーピングとの関連性を研究することで、親の養育スタイルに対応した子どもの性格と、コーピングスタイルとの関連性が見えてくると考えている。関連性が明らかになることで、コーピングスタイルの特徴から、適応タイプ、引いては「ドア」の選別の手がかりが得られると考えている。これらを目的に本研究を行う。

2. 方法

首都圏の私立大学に在学する大学生約400名を対象に質問紙を配布した結果、有効回答は201名（男性:82人 女性:118人 合計:201人）であった。平均年齢は全体で20.04(±1.12)歳、男性は19.99(±1.12)歳、女性は20.08(±1.12)歳であった。

質問紙の構成は、①ジョインズ人格適応型心理検査第3版（ヴァン・S・ジョインズ 2002）と、②青年（高校生・大学生）・成人を対象とした、対人ストレスコーピング尺度（加藤司 2000）を用いる。②の質問紙には、ポジティブ関係コーピング（相手との関係性を改善しようとする対処）、ネガティブ関係コーピング（相手との関係を放棄・破壊する対処）、解決先送りコーピング（問題を問題と捉えず、時間が解決するのを待つような対処）という3つの下位尺度が存在する。

3. 結果と考察

■適応タイプと対人ストレスコーピングとの相関係数

各適応タイプと対人ストレスコーピングとの相関係数を算出した結果、ポジティブ関係コーピングと熱狂的過剰反応者との間に弱い正の相関($r=.36$ $p<.01$)があった。この結果からポジティブ関係コーピングを選択するタイプは、熱狂的過剰反応者である傾向が示唆された。熱狂的過剰反応者は、自分の感情を大切にされることが重要であるため、ポジティブ関係コーピングを選択するタイプは、〈感情〉という「ドア」からアプローチすることが有効だと考えられる。ネガティブ関係コーピングは創造的夢想家($r=.31$ $p<.01$)、魅力的操作者($r=.22$ $p<.01$)、おどけた反抗者($r=.20$ $p<.01$)、責任感ある仕事中毒者($r=.20$ $p<.01$)との間に弱い正の相関があった。ネガティブ関係コーピングは複数の適応タイプと同程度の相関があるため、ネガティブ関係コーピングの得点から、適応タイプ、引いては「ドア」を選別するのは困難であると分かった。そして、解決先送りコーピングと適応の6タイプの間には優位な相関はなかった。飯沼(2012)によると、ネガティブ関係コーピング高得点者の中には、異なる特徴を持つ2群が存在し、「無思考、特性的使用群」(唯一の方略として選択しており、深く考えない、もしくは何も考えず使用しており、この行動は生まれつきである)と「熟慮的、選択的使用群」(様々なコーピングの中の1方略として選択しており、相手や状況、自分の状況など様々な理由から解決先送りコーピングを使用している)があると言う。つまり解決先送りコーピングを選択する者には、違った背景を持った2群が存在しているため、適応タイプとの相関が出なかった可能性が考えられる。

■コーピングスタイルにおいて1SD以上の被験者を対象とした適応タイプの特徴

質問紙への回答者全てを分析対象にするのではなく、1つの対人ストレスコーピングを典型的に行っている対象者の特徴を知るために、得点が1SD以上の回答者を分析対象者として(ただし、2つ、もしくは3つの対人ストレスコーピングへの回答が1SD以上の回答者は除いた)、それぞれの適応タイプの偏差の平均を算出した。その結果、ポジティブ関係コーピングのみ適応タイプ間に優位な差が出た。ポジティブ関係コーピングが1SD以上の対象者において、偏差の平均が創造的夢想家-0.58、責任感ある仕事中毒者が0.42、熱狂的過剰反応者0.36であり、「創造的夢想家<責任感ある仕事中毒者(有意差あり)」、「創造的夢想家<熱狂的過剰反応者(有意差あり)」という結果であった。よって、ポジティブ関係コーピングを中心に用いる人は、責任感ある仕事中毒者の〈思考〉という「ドア」もしくは、熱狂的過剰反応者の〈感情〉という「ドア」からのアプローチが有効である傾向が示唆された。

4. 今後の課題

人格適応論では男女差について言及されていない。今後の研究において男女別に分析すると、違った結果が出てくると考えられる。なお、3つの各ストレスコーピングの中には、様々な要素が含まれている。例えば、ネガティブ関係コーピングの質問項目の中に、明らかに他者との関係を放棄・破壊する内容と、そうではない項目が含まれている。よって、質問項目ごとに適応タイプとの関連性を見ていくことも必要だと考えている。

引用文献

- 阿部昌宏・井上裕美子・大山良徳（1999）．大学生の抑うつ状態に関する調査研究 大阪工業大学紀要, 44, 9—22.
- Brantly, P. J., Catz, S. L., & Boudreaux, E. (1997). Daily Stress Inventory. In C. P. Zalaquett & R. J. Wood (Eds.), *Evaluating stress: A book of resources* (pp. 97-112). Lanham, Maryland: Scarecrow Press.
- 独立行政法人 日本学生支援機構 (2011) . 「大学、短大、高等専門学校における学生支援取組状況に関する調査（平成 22 年度）」集計報告（単純集計） .
- Grayson, P. A. (1989) . The college psychotherapy client. Pp. 8-28. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds.) (1989) “College psychotherapy” The Guilford Press.
- 花岡啓子・花岡芳雄・石風呂素子・松野俊夫・村上正人・桂 戴作 (2001) . IE-9 医師と心理士の連記と心理療法の導入：人格適応論と治療のドアに関連して（チーム・コメディカル） 心身医学 41 (supplement II), 89.
- 花岡啓子 (2004) . 人格適応論：セラピーのドア心理テックアプローチの選択に関連して（シンポジウム II）（第 94 回日本心身医学会関東地方会演題抄録） 心身医学 44 (1), 67-68.
- 花岡啓子・江花昭一 (2009) . 人格適応論入門講座 心の扉の開き方—どこでもドアを手に入れよう（特集 日本交流分析学会中央研修会 テーマ：あの人の『心のくせ』はどう使えるか—現場で生かす人格適応論）、交流分析研究 34 (1), 6-19.
- 原田雅浩・尾関友佳子・津田彰 (1992) . 大学生の心理的ストレス過程—ストレッサーに対する認知的評価とコーピングおよびストレス反応— 九州大学教育学部心理学研究報告, 10, 1-16.
- 伊藤静香・森岡由起子・生地新・中谷真理子 (1999) . 親の養育態度と青年期の子どもの行動特性とストレスコーピング 心身医学 39 (6), 482.
- Margolis, G. Developmental opportunities. Pp. 71-91. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds.) (1989) “College psychotherapy” The Guilford Press.
- Havighurst [莊司 (監訳)] (1953) . 人間の発達課題と教育、玉川大学出版部.
- 林峻一郎・佐藤浩信・金子昌代 (1995) . 北里 (林) 版日常ハッスルズ アプリフツ調査表 (89) の信頼性 妥当性の検討の試み 日本社会精神医学会雑誌, 4, 31-42.
- Hobson, C. J., & Delunas, L. (2001). National norms and life-event frequencies for the Revised Social Readjustment Rating Scale. *International Journal of Stress Management*, 8, 299-314.
- 飯沼綾乃 (2012) . 人間関係ストレスにおいて解決先送りコーピングはマイナスか—大学生対象の質問紙、面接を通して— 本女子大学大学院人間社会研究科紀要 18, 63-83.
- 石津・安保 (2009) . 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究—個人的要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から— 教育心理学研究, 57, 442-453.

- 伊藤巨志・松本真言・渋谷崇行・小泉昌幸 (2000) .女子大生の生活ストレスに関する研究 37, 57 - 63.
- Joines, V. (1986). Using redecision therapy with different personality adaptations. *Transactional Analysis Journal*, 16(3), 152-160.
- Joines, V. (1988). Diagnosis and treatment planning using a transactional analysis framework. *Transactional Analysis Journal*, 18(3), 185-190.
- 加藤司 (2000) .大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究 48, 225-234.
- 加藤司 (2001). 対人ストレスコーピングと Big Five との関連性について、性格心理学研究 第9巻 第2号 140-141.
- 加藤司 (2001) . 対人ストレス過程における帰属とコーピング 性格心理学研究 第9巻 第2号 148-149.
- 加藤司 (2007) . 対人ストレス過程における対人ストレスコーピング 株式会社ナカニシヤ出版.
- Kahler, T. (1972). Predicting academic underachievement in ninth and twelfth grade make with the Kahler transactional analysis script checklist. Dissertation, Purdue University.
- Kahler, T. (1982). Personality pattern inventory validation studies. Little Rock: Kahler Communication, Inc.
- Kahler, T. (1996). The process communication model (PCM™) seminoe manual. Little Rock: Taibi Kahler Associates, Inc.
- Kahler, T. (1999). The miniscript: 1999 addendum. ITAA: TAJnet, 4 (internet publication at www.tajnet.org/articles/kahler-miniscript-addendum.html).
- Kahler, T. (2000). The mastery of management (4thed.). Little Rock: Kahler Communication Inc.
- Kahler, T. and Capers, H. (1974) The miniscript. *Transactional Analysis Journal*, 4(1), 26-42
- 小此木 加江 (2008) . 書評 交流分析による人格適応論—人間理解のための実践的ガイドブック ヴァン・ジョインズ/イアン・スチュアート著 白井幸子・繁田千恵監訳 心理臨床学研究 26 (3) , 358-360.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) . Stress, appraisal, and coping. New York : Springer Publishing Company. 本田寛・春木豊・織田正美監訳 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版.
- Lazarus, R. S., & Launier, R. (1978) . Stress-related transactions between person and environment. In L. A. Pervin & M. Lewis (Eds.), *Perspectives in interactional psychology*. New York: Plenum Press. 287-327.
- Lazarus, R. S. (1993) Coping theory and research: Past, present, and future. *Psychosomatic Medicine*, 55, 234-247.
- 永野園子 (1995) . 友人との葛藤場面における逃避的解決ストラテジーの様々—事例的研究—

- 日本女子大学 人間社会学研究科 心理学専攻 94-77-008.
- 西岡安哉美 (2002). 学年差から見た大学生のストレスにおける認知的評価と対処—発達課題としてのストレス— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達学 49, 322—324.
- 塗師斌 (1993). 大学生におけるストレスとコーピング 横浜国立大学紀要 33, 241—264.
- 塗師斌 (1995). ストレスとコーピングの因果モデル構成の試み、横浜国立大学教育紀要 35, 31—39.
- 尾形明子・鈴木伸一・大園秀一・佐伯俊也・萬谷智之・小林正夫・山脇成人 (2006). 小児がん患児の学校不適応と母親の子どもの健康に関する認知 小児がん：小児悪性腫瘍研究会記録, 43 (2), 180—185
- 尾関友佳子 (1990). 大学生のストレス自己評価尺度、久留米大学大学院紀要比較文化研究 1, 9-32.
- 尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の海底—トランスアクションナルな分析に向けて— 久留米大学大学院比較文化研究科年俵 1, 95—114.
- O' Brine, T. B., & DeLongis, A. (1996). The interactional context of problem-, emotion-, and relationship-focused coping: The role of the big five personality factors. *Journal of Personality*, 64, 775-813.
- R・J・ハヴィガースト (1995). (荘司雅子監訳) 人間の発達課題と教育.
- 佐藤理絵・花岡啓子・松野俊夫・石風呂素子・矢木佑子・村上正人・桂 戴作 (2004). 1. 人格適応論と自律訓練法の併用の試み(第95回 日本心身医学会関東地方会演題抄録) 心身医学 44(8), 610.
- Scully, J. A., Tosi, H., & Banning, K. (2000). Life Event Checklists : Revisiting the social readjustment rating scale after 30 years. *Educational and Psychological Measurement*, 60, 864-876.
- Seiffge-Krenke, I., & Shulman, S. (1993) Stress, coping and relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates. 169-196.
- 嶋信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートと日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 第7巻第1号 45—53.
- 白井幸子 (2009). V・ジョインズと「交流分析による人格適応論」(交流分析の新たな展開—E・バーン以後の展開)—(最新の交流分析理論)、現代のエスプリ 506, 93—109
- 鈴木圭子 (2009). 心理臨床における人格適応論はどう使えるのか—現場での交流分析学会中央研修会テーマ：あの人の『心のくせ』はどう使えるか—現場で生かす人格適応論)—(シンポジウム人格適応論はどう使えるか—現場での交流分析活用のケースから) 交流分析研究 34 (1), 20-28.
- 鶴田和美 (2001). 学生のための心理相談 培風館 2-11.
- 外山美樹・桜井茂男 (1999). 大学生における日常的出来事と健康状態の関係—ポジティブな

- 日常的出来事の影響を中心に— 教育心理学研究 47, 374-382.
- 上田裕美 (2002) . 抑うつ感を訴える大学生 (特集 うつの時代を生きる) 教育と医学 50, 428-433.
- 上原徹・佐藤聡・坂戸薫・坂戸美和子・佐藤哲哉 (1997) . C-12 - 19 幼少期における両親の養育程度はストレス対処行動に影響を与えるか? (家族とストレス) 心身医学 37 (抄録), 169.
- ヴァン・ジョインズ/イアン・スチュアート [繁田千恵・白井幸子 (監訳)] (2007) . 人間理解のための実践ガイドブック 交流分析による人格適応論、株式会社誠信書房.
- ヴァン・S・ジョインズ [白井幸子・繁田千恵・城所尚子 (訳)] (2012) . ジョインズ人格適応型心理検査 (JPAQ) 第3版 解釈マニュアル、株式会社誠信書房.
- Ware, P. (1978). Personality adaptations. Workshop conducted at the Southeast Institute for Group and Family Therapy, Chapel Hill, North Carolina.
- Ware, P. (1983). Personality adaptation (Doors to therapy). *Transactional Analysis Journal* 13(1), 11-19 .
- Watson, D., & Hubbard, B. (1996). Adaptational style and dispositional structure: Coping in the context of the five-factor model. *Journal of personality*, 64, 737-774.
- Watson, D., David, J.P/. & Suls, J. (1999). Personality, affectivity, and coping. In C.R. Snyder (Ed.), *Coping: The psychology of what works* (pp119-140). New York: Oxford University Press.
- Wethington, E. (1997). Structured Life Events Inventory. In C.P. Zalaquett & R.J. Wood (Eds.), *Evaluating stress: A book of resource* (pp39403). Lanham, Maryland: Scarecrow Press.
- 八尋華那雄・井上真人・野沢由美佳 (1993) . ホームズらの社会的再適応評価尺度 (SRRS) の日人における検討 健康心理学研究, 6, 18 - 32.